

農業用のため池の役割と レクレーションの場として 国 兼 池



広島県で最大の農業用ため池である国兼池は、正保3年(1646)に谷川の水をせき止めて造られたものです。この池には、堤が切れて被害を受けていましたが、お国とお兼の人柱によって堤がきれることもなくなったことから、国兼池と呼ぶようになったという伝説があります。真偽はともかく、この池の工事に苦労したことがうかがえる話ではあります。

延宝3年(1675)、地域住民によって国兼池の改良工事が行われました。木樋は老朽化すると樋の周辺からの漏水で堤防の決壊が起こることが多く、このため木樋を石樋に改良するとともに、堤防を補強したということです。これにより、国兼池は近郷では見られないほどの周囲1.5km、53.3haをうるおす大池となりました。しかし、堤防の決壊の恐れはなくなったものの、水田の面積に比べ貯水量が少なく、干ばつを防ぐことはできませんでした。

嘉永7年(1855)神川平助は代官所筆頭として恵蘇郡の難漕者仕法方として配置され、5年後の万延元年(1860)、農業振興と住民福祉のため、国兼池の堤防の嵩上げ工事にかかりました。工事は文久2年(1862)に完成し、藩内随一の大池になり、その恩恵は山内西から和知にまで及びました。その後、上原村には水源がないため、三日市から上原へ水路を造る計画が立てられました。必要な水は本村川から水を引く方法でしたが、神川が出夫を強行したため地域農民から反感を買い、ついに慶應3年(1868)百姓一揆勃発で神川は去り、国兼池の工事は中止となりました。

それから70数年を経た昭和17年(1942)、山内東村の林修一村長は本村川から水を引くという神川案での工事を進め、昭和24年に完成させました。続いて堤防の嵩上げ工事が国の開拓事業として始まり、昭和28年に山内は現在のような耕地が広がる台地となりました。

国兼池は、地域の農業用水源の役割を担うとともに、散策路やフィッシング施設が整備された国営備北丘陵公園で、訪れた人々に安らぎを与える水辺空間としての一面も見せています。

■位置図



里山の風景を形成する備北丘陵公園。その中核として総貯水容量106万立方メートルの国兼池は広島県最大、西日本でも有数の規模の灌漑用貯水池である。



24年目を迎えた備北丘陵公園イルミネーション2018
中の広場、ひばの里、花の広場の3つのエリアが装飾されている



国兼池の堰堤。堤体左岸に洪水吐きがある。



本村川から暗渠で国兼池に導水されている。



国兼池改修記念碑(奥)と神川平助碑
後の弁財天の祠はお国とお兼を祀るもの。